

# 第8章 発掘成果からみたホイアンの町並み形成

菊地 誠一

## 1 はじめに

1993年から95年まで、第6次にわたるホイアン旧市街地の試掘・発掘調査を実施してきた。調査面積は、すべてをあわせて約50平方メートルであり、この少ない調査面積からホイアンの町並み形成を論ずることは至難のわざである。しかし、発掘調査地点がチャンフー通りに5地点、グエンティミンカイ通りに2地点5カ所、ファンチューチン通りに1地点、チャンフーとファンチューチンの間に1地点と分散しており、考古学資料を利用してこの町並み形成を素描することは可能と思われる。

ところで、ホイアン旧市街地における考古学調査の主眼は、この地における居住の開始時期の特定と17世紀に存在した日本町の位置、ならびにその都市構造や生活様式、そして現在の町並みへといたるその形成史の解明にある。ここではおもに居住開始時期と形成史に絞り、以下論じてみたい。

## 2 旧市街地の居住開始時期

ホイアン地域の歴史は古い。すでに第3章、第4章で紹介したように、この地域で確認できる最古の遺跡は、旧トゥボン川沿いに分布するサーフィン文化の甕棺墓群である。放射性炭素<sup>14</sup>C分析の結果によると、西暦紀元前310年前後の数値がえられている。また、副葬品に中国の新代の“貨泉”銭や“五銖”銭をともなう甕棺もあり、紀元後まで継続する。その後はチャンパ時代の遺跡がある。調査された遺跡では、ホイアン市郊外のランバーやアンバン、チャンソイ、タインチュム、クーラオチャムなどの遺跡から9世紀前後頃のイスラム陶器や中国越州窯青磁、長沙窯陶器、そして中国龍泉窯青磁、徳化窯白磁などが出土しており、東西交易を考えるうえで貴重な資料である。またチャンパ彫刻がランバーやアンバンなどで確認されている。こうした考古資料からホイアン地域は、初期チャンパ王国の港市と考えられており、聖地ミソンや都チャキウと並ぶ、重要な地域であった。

こうしたサーフィン文化時代からチャンパ時代の遺跡が、このホイアン地域に広く分布していることは上記のように考古学的に証明されている。しかし、伝統的町家群が密集し、文化財地域に指定されているホイアン旧市街地はどうであろうか。

1989年にハノイ総合大学が日本橋付近のグエンティミンカイ通り2番家の庭と同通りのチャン・フォック・ニュー氏の庭にトレンチをいれ発掘調査を実施し

1) Hoang Van Khoan, Lam My Duug, Ha Thi Loan. 1990  
Tham sat khu vuc Chua  
Cau o thi xa Hoi An.  
NPHMVKCH1989.173-174.

た。第1トレンチでは自然層の砂層まで深さが90cmあったが攪乱が多く、陶磁器やフランスの貨幣(第2層)が出土した。第2トレンチは自然層までの深さが65cmであり、このトレンチから古い家のレンガ基礎と排水溝が検出されている。しかし、遺物の大半が地表面下30cmまでのところで出土しただけであった。この2地点で出土した遺物は中国の明・清代陶磁器やベトナムの黎朝、阮朝時代の陶磁器と報告されている<sup>1)</sup>。またこの地は攪乱が多く、また文化層も薄いことから以前は川岸であろうと推測されている。現在この遺物は所在不明であり、筆者は観察できないでいるが、報告からチャンパ土器や中国龍泉窯青磁などの古い陶磁器はないようである。

また、1993年からすすめたわたしたちの発掘調査によっても、チャンフー通り65・69・144・78・80・85番地点で出土した陶磁器類は、すべて16世紀末以降の中国陶磁器、17世紀後半の肥前磁器、17世紀以降のベトナム陶器、17世紀代のタイ陶磁器である。16世紀以前にさかのぼる陶磁器は皆無である。また、グエンタイミンカイ通りのディン・カムフォーやディン・トゥレー地点においても16世紀末以降の陶磁器の出土である。とくに、ディン・カムフォーで検出された川跡から多数の陶磁器類が出土したが、この遺物のなかに16世紀末以前のものは含まれていない。この地区がチャンパ時代からの居住地であれば、川跡にはチャンパ時代に属する土器や中国陶磁器類などが出土してもよさそうである。しかし、それがない。また、ファンチューチン通り129番地点の調査でも、トレンチ内の土層の観察からこの地が常時帯水した状況をしめしており居住地に適さないが、出土遺物からみるとチャンパ時代にさかのぼるものはない。すべて16世紀末以降の陶磁器類である。

発掘調査を実施していないが、チャンフー通りの南側の通りであるグエンタイホックやバクダン地区は、各家が保管している「家屋台帳」によって19世紀前半まで川が迫っていたことが判明している。チャンフー85番の地の発掘結果からも、そのことが実証されている。そのため、この地区への居住開始は川が南下したあとの19世紀以降であり、17世紀以前の居住地にはなりえない。

以上のことにより、ホイアン旧市街地の町並み保存地区の居住開始時期は、出土遺物から判断して16世紀末以降ということになる。つまり、保存地区はチャンパ時代の居住地ではなかったと考えられる。

### 3 町並み形成

ではつぎに、現存する町並みの形成過程をチャンフー通り85番の発掘成果とそれぞれの家が保管している「家屋台帳」の分析から復元してみよう。

家屋台帳を分析したマーク・チャン氏によると、確認できる家屋台帳の最古のものは、レロイ通りとチャンフー通りの交差点にあるレロイ47番家の土地売却契約であり、景德28年(1767年)であるという。また、チャンフー55番の土地登記証文(泰徳8年、1785年)以外、レロイ通り東側のチャンフー通りの家屋台帳は全部19世紀以降のものであった。そして、グエンタイホック通りの最古の家屋台

帳は、タイホック54番の嘉隆10年（1811年）のものである<sup>2)</sup>。

このなかで、チャンフー85番の1811年、1812年、1838年、1876年の家屋台帳があり、チャンフー通り以南の町並み形成過程を復元することが可能である。まず、1811年の家屋台帳には、

「土地面積一頃十四尺…東側煉瓦壁は劉氏晋の壁に接している。西側煉瓦壁は劉珠娘の土地に接している。この土地既に彼女に抵当した。南に大江有り。北に大通り有り。」

とあり、この家の南に川があったことがわかる。また1812年と1838年の家屋台帳にも「南に大江有り」とあり、1838年頃まではチャンフー85番の南は川であった。ところが、1876年の古文書によると、

「これらの土地家屋を平等に分配することに同意する。分配される土地家屋は以下の通り。

一、祠堂（五間、台所一間）

東端は阮家の土地家屋と接しており、西端は盛家の土地家屋に接している。南には井戸と氏科の現住居があり、北には大通りがある。

二、潘氏科の現住居（新構築の五間瓦葺家）

東端は阮家の土地家屋と接しており、西端は源家の土地家屋に接している。南には小道があり、北には井戸と祠堂がある。

三、潘有伴の現住居（新構築の五間瓦葺家）

東端は阮家の土地家屋と接しており、西端は順家の土地家屋に接している。南には江があり、北には小道がある。」

これらを図示すると図94のようになる。家屋台帳の分析から判断すると、チャンフー85番の南は川であったが、時代が新しくなるにつれて川が南下し、河岸が住宅地化していくことがわかる。

すでに、第5章第2節で報告したように、わたしたちはチャンフー85番の後家部分の発掘調査を実施した。発掘結果によれば、最下層で出土した陶磁器片は17世紀末から18世紀前半代のものであり、そのため検出された建築遺構もその年代があたえられる。つまり、17世紀後半にはこの地はまだ居住地とはなっていなかったのである。最下層である事業層の下は貝殻が多数検出されたため、17世紀後半はおそらく川か、あるいは川岸であったと思われる。そのため、旧市街地の中央地区、チャンフー通りの南側は17世紀末、あるいは18世紀以降に居住が開始されたのである。チャンフー通りの南に位置するグエンタイホック通り、バクダン通り地区は、当然のことながら川の南下にともなって居住がはじまったのであり、それは早くとも19世紀以降のことであろう。

以上のことにより、現在のホイアン旧市街地の町並み形成の歴史は、発掘成果と古文書の解読の成果によって、現在の木造町屋群がひろがるチャンフー通りの町並みは18世紀以降にできたものであり、グエンタイホック通り、バクダン通りの町並みはそれ以降、19世紀代となる。

つまり、現存の町並みは17世紀代にあったとされる“日本町”跡のうえに形成

2) マーク・チャン 1994

「古文書から見た町並み形成」

『ベトナム・ホイアン特集』

昭和女子大学国際文化研究所

紀要Vol.1.81-83.

されたものではないことになる。

### 3 17世紀の居住域と日本町の位置

チャンファー通りに面する南北地区、グエンタイホック通り、バクダン通りが17世紀代の居住域とはなりえない以上、17世紀代の居住地ははたしてどこにあったのであろうか。それは、また当時存在していたとされる日本町の位置の問題とも関連する。

東南アジアの日本町の研究に多くの業績を残した岩生成一氏は、ホイアンの日本町の位置を、「…、恐らく今の日本橋通りを中心とする地域なる可く、…」<sup>3)</sup>と考へ、またハノイ国家大学教授のヴー・ミン・ザン (Vu Minh Giang) 氏は、「かつての日本人町は現在のチャンファー通り、より具体的には通りの南側に当ると推定している」<sup>4)</sup>とのべている。最近では、小倉貞男氏がホイアン地域に分布する古井戸をチャンパ時代のもの（後の時代にベトナム人や中国人が修復しながら使用）と考へ、その分布状況から「ホイアン旧市街地はチャムの町」<sup>5)</sup>とのべた。旧市街地に分布する古井戸は、図示したようにおもにチャンファー通り北側地区

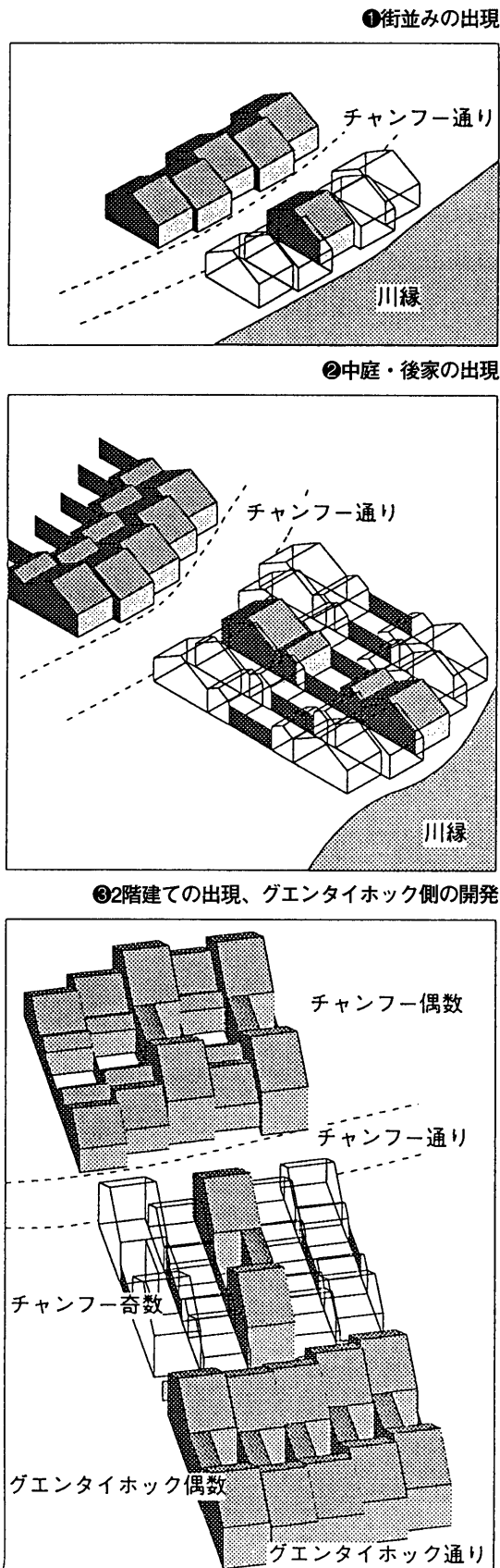


図93 街区の発展過程(グエンタイホック通りの出現)

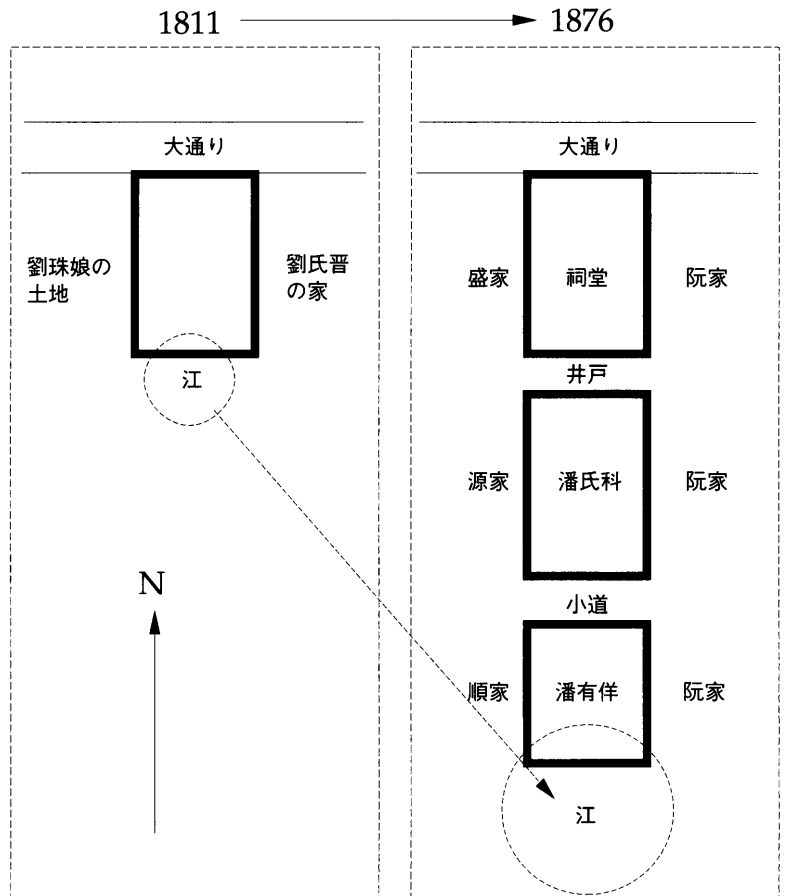


図94 古文書によるチャンファー85番の変化

に分布している。そのため、小倉氏は日本町の位置をその地域に想定しているようであるが、はっきりとしない。ただ、氏の見解はチャンパ時代の町の上に、17世紀の日本町、そして現在の町並みがあるということであろう。

こうした先学の研究に対して、93年からわたしたちがすすめてきた旧市街地の発掘調査は、多くの新しい事実を提出することになった。つまり、ヴー・ミン・ザン教授が日本町跡と考えるチャンフー通り南側地区は、はやくとも17世紀末以降の居住開始であったことがチャンフー85番の後家跡の発掘調査で判明したのである。また、岩生氏の日本橋通り（チャンフー通りのこと）を中心とする地域も、チャンフー65・69・144・78・80・85番の発掘結果や48番の下水道工事にともなう掘削溝の観察から17世紀代にさかのぼる遺構はなく、考古資料からこの地域を日本町跡に比定することは難しい。

小倉氏は古井戸を、「底辺部はチャム時代につくられたものであることはほぼまちがいのない」とのべ、また「ホイアン旧市街地はチャムの町であったことが井戸から確認される」という<sup>6)</sup>。しかし、注意を要するのは、古井戸をチャンパ時代の所産と考えるのか、あるいはチャム人の構築した井戸と考えるかで問題が異なる。つまり、両者はその意味をまったく異にした事柄であり、これを同一と考えて論を展開しては大きな誤りを生んでしまう。

わたしは、古井戸の分布を17世紀以降の居住域を推定する重要な資料と考えている。その理由として、まず、前項で指摘したように、保存地区（旧市街地）で

- 3) 岩生成一 1940『南洋日本町の研究』,34頁.
- 4) ヴー・ミン・ザン 1993「ホンアンの日本人・日本町及び日本人の遺跡」『海のシルクロードとベトナム』,253頁.
- 5) 小倉貞男 1994「ホイアン日本町からチャムが見える」『チャンパ王国の遺跡と文化』,82頁.
- 6) 5)と同じ.

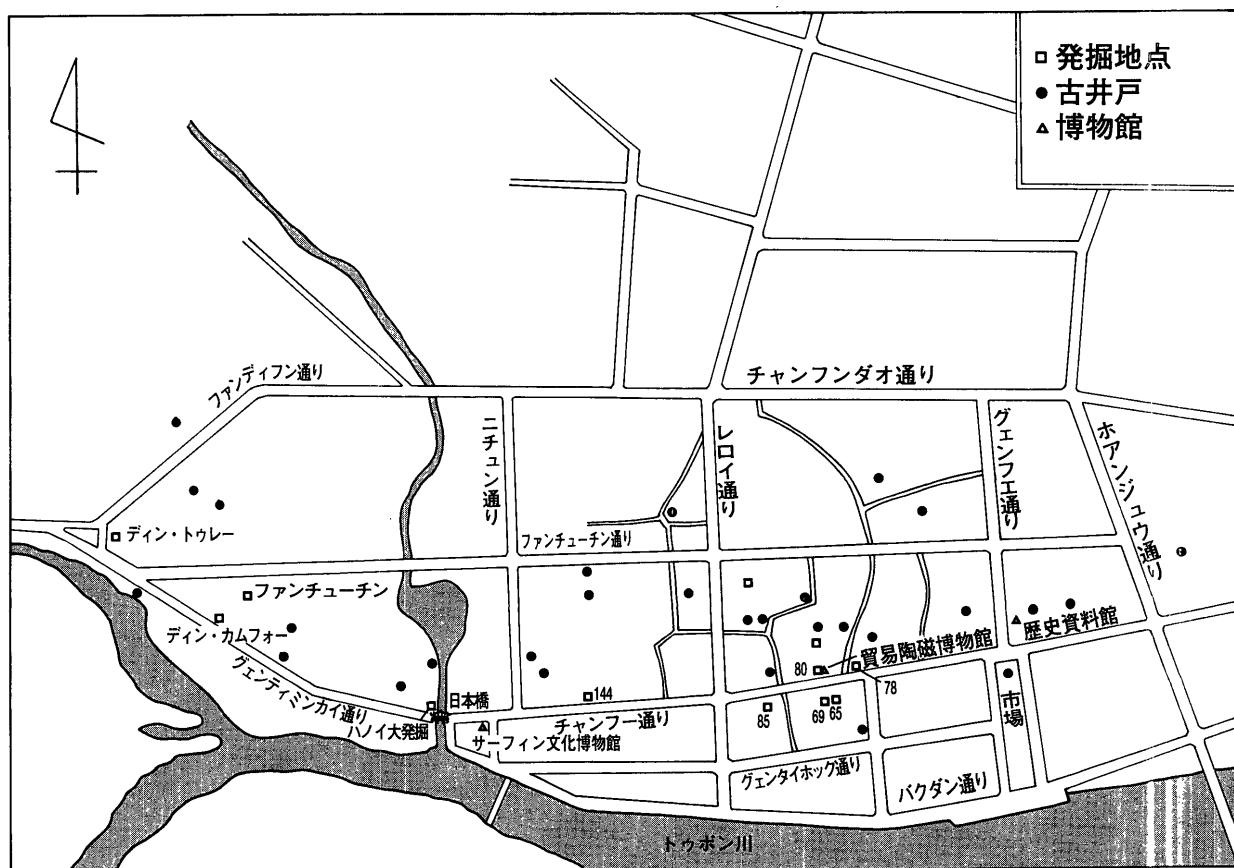


図95 古井戸分布図

はチャンパ時代の遺物がまだ検出されておらず、そのため古井戸をチャンパ時代までさかのぼらせることはできないということである。考古資料からみると、この町並み保存地区は16世紀末以降の居住開始であり、この時代以降のなかで井戸の構築を考えるべきである。

また、氏も指摘されたように、井戸の構築技術は確かにベトナム人のそれではなく、チャンパ建築（祠堂）の系譜のなかに位置づけられる。しかし、それはチャム人の関わりを意味するもので、チャンパ時代に属することを意味するものではない。『烏州近録』（1553年）によると、ホイアン地域を含むディエンバン県には、「婦人着占布之裾」と記され、チャム人の存在が知られる。また、「羅江之人語占語」とある<sup>7)</sup>ように、大越時代になってもいぜんとしてチャム人が住んでいたのである。

7) 楊文安 1553『烏州近録』  
ベトナム漢喃研究所の所蔵本  
A.263を使用。

さらに、氏はホイアン地域に広域に分布する古井戸のうち、トゥボン川河口の南側にある川跡に沿っている例をあげている。おそらく、チュンフォン（Trung Phuong）地区の井戸のことであろう。わたしたちは、1997・98年にトボン川河口の左岸・右岸地域をへてディエンバン県にいたるホイアン地域の遺跡分布調査を実施した。その調査の結果、チュンフォン地域ではチャンパ時代にさかのぼる陶磁器類の採集はできず、すべて16世紀末以降の中国陶磁器や17世紀後半の肥前磁器であった。

チュンフォン地区の古井戸の分布する遺跡の性格に関して、港跡と考える意見がある。わたしはこの地区を阮氏（広南）の水軍基地跡と考えている。その理由は、17世紀前半にホイアンに滞在した宣教師、アレキサンドロ・ド・ロードの『トンキン王国の歴史』に、ダンジョン（阮氏治下の中中部ベトナム）には3つの水軍基地があり、そのひとつはケーチャム（Cacciam, Ke Cham）とよばれる地に、国土と中国商船防衛のために軍艦を配置していたという記載があるからである<sup>8)</sup>。チュンフォンが河口に近い地理的優位性を持ち、また砂丘が発達し、これが防衛上の機能をもっている点、軍艦の停泊に有利な広大な潟湖（川跡ではない）が形成されている点、そして採集遺物や古井戸の分布から、水軍基地跡と考えるのである。なお、このことについては別稿で詳論したい。

8) Alexandre de Rhodes  
1651『Histoire du Royaume  
de Tunquin』

このように、古井戸の分布をチャンパ時代とただちに結びつけて考えることはできない。ましてや、保存地区内の古井戸をチャンパ時代に結びつける根拠はなく、考古学資料からは16世紀末以降の所産であり、そのため古井戸の存在は日本町があった17世紀の居住地を推定するうえで重要な資料となるのである。

ところで、17世紀代の居住が確認できた地点は、日本橋から西の地区である。ディン・カムフォー地点とディン・トゥレー地点で、この時期の遺構を検出した。カムフォー地点の溝状遺構から大量の陶磁器類が出土し、この地区に多くの人びとの居住を想定することが可能である。しかし、それが“日本町”跡にかかわる遺構なのかは、出土した遺物からでは現在のところ決定することができない。日本橋の東地区では、古井戸の分布するチャンフー通り北側で、ファンチューチン通りの南側地区が17世紀代の有力な居住地と考えられる。

#### 4 おわりに

従来、ホイアンにあった日本町をかたるとき、古い町並みの存在や伝承などからチャンフー通りが有力視されてきた。しかし、わたしたちの発掘調査の結果は、それらの説を否定することになった。現在の町並みや伝承などから、日本町の位置を特定することはできず、またディン・カムフォー地点で検出された川跡のように、17世紀代の地形は現在のそれと大きく異なっていたことが判明したのである。

今後は、17世紀代の居住城の広がりを確認する継続的な考古学調査が必要である。わたしたちは、1998年8月に保存地区内の発掘調査を計画している。わずか数平方メートルのトレンチ調査であるが、こうした調査を継続するなかで、居住城の広がりや日本町の位置やその都市構造、生活様式などを明らかにしていきたいと考えている。

また、同時にホイアン地域の形成史を解明するための遺跡群の把握も必要と考え、1997・98年と遺跡分布調査を広域にわたって実施した。その結果、ホイアン地域の17世紀代の遺跡を把握することができた。そして、こうした遺跡間の空間構造や日本町との関係の解明のため、また出土遺物から東アジア・東南アジアの交易ネットワークを解明し、ホイアンの国際貿易港としての歴史的な位置づけをするために、今後もベトナム側と共同でホイアン地域の考古学調査を継続する予定である。なお、これらの成果については、別稿で詳論する予定である。

(図93と図94は『ホイアンの町並みと建築』から引用)